



ベトナム社会主義 共和国体験記

冨田健次*

Far Eastern Economic Review 誌2月10日号(1983年)でFrançois Nivolon 記者は、最近のベトナムの経済政策の諸矛盾を鋭く抉り出し、国民の生活はそれ以前の in misery の状態から in poverty な状態に推移したに過ぎないと酷評している(pp. 65-66)。筆者は、正にその in poverty な経済状況にあるといわれるベトナム北部での半年間の生活を終え、この2月末に帰国した。

昨年(1982年)8月中旬、ベトナム社会主義共和国大学・高等専門学校省からやっと1通の招待状が届いた。ジャーナリストや商社員、団体旅行者の短期滞在はさることながら、政治的立場を問わず長期間滞在することを許された、南北統一後最初の日本人であると聞かされ、責任の重大さに武者ぶるいしたものだ。

雨期はもう終わろうとしていたが、機上からみる広大な紅河(ホン・ハー)デルタは一面の水浸しで、正に肥沃そのものにみえた。このような肥沃



機上より遠望したホン・ハー・デルタ。雨期はもう終わろうとしているが、一面の水浸し。1982年9月10日撮影。

* Kenji Tomita, Thai & Vietnamese Department, Osaka University of Foreign Studies, 2734 Aomadani, Minoo City, Osaka 562, Japan

な穀倉地を二つも抱えたベトナムが、いまなお、貧困にあえがなければならないとは一体どうしたことだろうか。

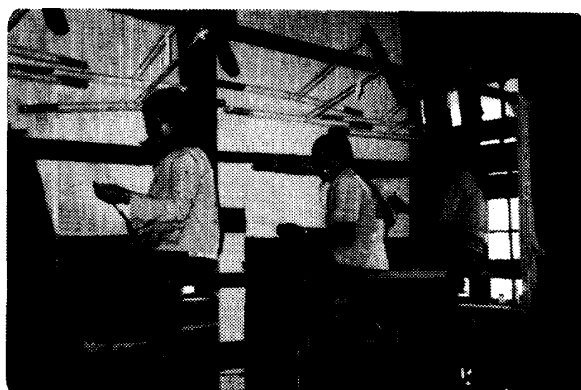
ハノイでは、現地の人との接触到に大きな障壁となるホテル住まいを避け、筆者を受け入れてくれた略称大学省に属するハノイ^{トンホップ}総合大学(主として文化系の総合大学)が、^{バンクコク}百科大学(主として理科系の総合大学)の敷地内に所有する、ベトナム語学部外国人留学生寮に寄宿することにした。おかげで各階層のベトナム人とほぼ自由に接触することができ、おまけに友好国といわれる各国の留学生たちの抱くベトナム観、ベトナム人観を尋ねることができた。

寮には、ラオス人留学生と南イエメン人留学生が各4人で一番多く、次いで東ドイツ、チェコ、パレスチナ人留学生が各ふたり、ポーランド、ソ連から各ひとりで、ソ連からの留学生が少ないのがやや意外であった。資本主義国からは、筆者のほか、一貫したベトナム援助で友好国待遇を受けているスウェーデンからふたり、それに意外にもマレーシア人の若い歴史家と、筆者が帰るちょうどその日に、フランス人の若い女性言語学者も加わるという多彩な顔触れであった。学部の授業には、さらにハンガリー人学生、各国の大使館員やその子弟、ジャーナリストの奥方連なども加わり、毎日まことに国際色豊かな光景が展開されていた。

今回のベトナム訪問の目的の一つは、いわゆるベトナム戦争後の復興の状況を、この目で確かめてみたいということであった。筆者は、ベトナム戦争終結後ほぼ1年を経た1976年3月末に、短期間ベトナム北部を旅行したことがあり、それから6年あまりを経過したベトナムの現状がどうなっているのかをみてみたいという強い欲求があった。しかも、われわれ日本人にとってはまことに

厳しい環境にあるといわれるベトナム北部で、実際に生活体験を持ってみたいということもあった。豊かさと暮らし易さでは数倍優る南部では、ごく短期間ではあるが生活体験もあり、南部人の気質もほぼ理解しているつもりであるが、北部の人々の生活ぶり、それも社会主義体制下での彼らの生活を見聞することは、全く初めての経験であった。

ベトナムの戦後復興は総じて悲観的といわざるを得ない。確かにこの8年間、ベトナムにとってはずいぶん思いがけないマイナスな事件が相次いだ。カンボジアとの国境紛争に端を発するいわゆるカンボジア問題、それに付随する中国との国境紛争、日本など西側諸国からの援助打ち切り、そのほかにも水害や旱魃などの天災まで加わり、戦後復興事業にとってはどれを取っても不利な材料ばかりで、同情の余地はある。平和になったら、国が統一できたら、それまでベトナム戦争に割かれていた膨大な軍事費を縮小して国民経済を建て直す計画であったはずであるのに、上の一連の事件はいまなおそれを許していないのである。極度の緊張状態から一挙に解放された国民もまた、経済的安定、文化的生活を享受できるものと確信していたのが、いつまで待っても一向に希望がかなえられない。そんなもどかしさ、やるせなさが国民



ドン・ダーじゅうたん工場の女性労働者。1982年12月17日、ハノイ随一のじゅうたん工場を見学。ほとんどが手作業であり、1日8時間、坐りづくめであるというが、女性労働者たちは明るく、くったくがない。1カ月平均250ドン（実勢750円弱）の給料のほかに、能率給もあるという。

の間に蔓延しているようであった。

ベトナム滞在中最も気になったことは、貧富の差の拡大と地方差の拡大であった。前述のNivolon 記者の指摘を待つまでもなく、現在のベトナムでは、給料と配給だけで生活するのはほぼ困難な状況にあり、国民は総じて公務以外のアルバイトによって辛うじて糊口を凌いでいる。農民は余剰農作物を自由市場で換金することにより容易に現金収入を手にすることができるが、都会の労働者はよっぽどの技術と資本がなければそれも不可能だ。1台のミシン、1台のタイプライターがどれほど貴重な宝であるか、ベトナム滞在中いく度となく聞かされたものである。こうして、まず農民と都会の労働者層の間に経済的格差が生じ、さらに都会の個々の労働者の間でも技術と資本の差による大きな経済的格差が生まれているのは確かである。

また、Nivolon 記者も先の記事の中で述べている通り、政府による小売り、小企業の自由化政策と農業刺激政策の恩恵によって、元来商才に長け、購買力もあり、しかも地縁・血縁で、いわば「外」の世界との繋がりを有する南部の経済は、北部を全くおいてきぼりにして、どんどん発展し、両地域の経済的格差はますます拡大しつつあることも事実のようである。

しかし、物質の豊かさだけで国民の生活を計るのは危険である。世界の最強国を打ち負かしたのだという彼らのあの絶大なる自信、忍耐力、強靱な精神力こそが、彼らの日常を支えるエネルギー源であるのも間違いない。いく世代にもわたる植民地支配は、彼らに「理想主義的現実主義」とでもいえる「弁証法的」生き方を教えた。理想は執拗に追い求めつつ、その日常生活は見事なまでに現実的なのである。われわれがさも深刻ぶって社会主義の矛盾などと騒ぎ立てているほどには、彼らには矛盾とは感じられていないのかもしれない。これこそが理論の枠を越えた、いわば東南アジア型の社会主義の本領と考えると、ベトナム滞在中の疑問はことごとく氷解するのである。(大阪外国語大学タイ・ベトナム語学科講師)